

□東日本大震災の体験を基に開発された 「仙台発そなえゲーム」

NPO法人FORYOUにこにこの家
理事長 小岩孝子

東日本大震災の教訓を全国へ、未来へ、伝えていきたいという願いを新しい防災「仙台発そなえゲーム」として、市民協働で開発し、普及活動をしています。

(1) 2011. 3. 11. 14:46 東日本大震災発生

私たちが住む太白区東中田地区は津波の被害を大きく受けた名取市閑上の隣の町です。近くの小学校が指定避難所にならなかったこともあり、法人が運営する仙台市東四郎丸児童館に300人近い住民が身を寄せました。指定避難所ではなかったため、児童館のスタッフは戸惑いながらも懸命に避難者を受け入れました。午後4時ごろ、津波警報が鳴り響く中、住民が次々と児童館に避難してきました。最初に来たのは車椅子の方とその家族でした。自宅に帰すことはできないと受け入れを決め、避難者に呼びかけました。「津波が近くまで来ています。ここも津波の心配があります。西側の小中学校に移動するかどうか、各自で判断してください」と。約260人が児童館に残りました。そのとき、2010年に、にこにこの家が代表・事務局をしている地域福祉ネット「ほっとネット in 東中田」の講習会で体験していた避難所シミュレーションゲーム「HUG」が役に立ちました。1回体験しただけではよく分からないこともありましたが、「あとからたずねてくる人もいるから名簿作成をすること」「個別の部屋割りをすること」の2つを思い出し、病人や子ども連れの方、

妊娠している方、同じ町内会の方たち、車椅子の方、ペットを連れてきた家族など、避難者の事情に応じて部屋割りを決め、名簿を作成しました。ろうそくや懐中電灯の明かりを頼りに、避難してきたみんながノートに住所・氏名・町内会・連絡先などを書いてくれました。夜中まで人の流れは続き、その名簿から家族や知人との出会いの場を作ることができました。

また、避難してきたみんなの助け合いがありました。中学生は避難者に食料を配り、高校生は壊れた自動ドアを一晚中自分たちの体で押さえ通路を作ってくれました。お年寄りはラジオで情報を集めて知らせてくれました。何か手伝うことあったらと声をかけてくれる方やろうそくの明かりを見守ってくれた人もいました。一度家に戻り食べ物をもって来てくれる方もいました。消防団の方たちは避難者の人数を聞き、ビスケットや毛布を運んでくれ、発電機も準備してくれました。地域みんながつながって、みんなで助け合えた一晚でした。翌朝6時前に今後のことを相談しに小学校に行きました。指定避難所にはなかった小学校の職員室では先生たちがもくもくとアルファ米を握っていました。閑上や地域からの避難者を三階に避難させ、懸命に対応していました。「二箇所を避難所にするよりは一箇所にしよう。」と翌日からは東四郎丸小学校に避難者を集めることになり、「緊急避難所」としての児童館の役割は終わりました。その後は先生たちとみんなで水

の出ない小学校へ児童館から水運びをしたり、地域の集会所に集まっている高齢者の方たちへアルファ米を運んだり、学校と連携して動きました。

その後は「あったかいものを閑上の人たちや地域の方たちに食べいただこう。」とにこにこの家のスタッフは5回の炊き出しをして、東四郎丸小や児童館を「にわか茶屋」にしました。また地域の河北新聞販売店ときた新聞店さんの「伝言板」は住民の情報共有の要となりました。「伝言板」を見て、住民が食材を提供してくれたり、四郎丸小に届けられた冷凍食品などを教頭先生や大学生たちがリヤカーで運んでくれました。この「伝言板」のお陰で「カレーが食べたいけど動けない」と連絡してきたエレベーターの止まった市営住宅に住む高齢者に高校生がお弁当を届けることができました。このことから、避難所に来られない方たちがたくさんいるのではと気づき、ほっとネット in 東中田の仲間である地域包括支援センターさんに情報をいただき、仙台ワークキャンパスさんには法人に届けられた支援物資を提供していただき、一人暮らしの高齢者や障がいを持つ方たちに地域の小中高生と一緒に弁当や支援物資を届けることができました。

地域・学校・「ほっとネット in 東中田」の団体が食材や支援物資を提供してくれたこと、2007年から児童館と共に企画・運営をしている小中高生ボランティア「チーム東中田っ子」たちが来てくれ、要支援者の方たちにもお弁当や支援物資を届けることができたことから、「平日頃のつながりの大切さ」が非常時には役に立つことを実感しました。緊急時でも「日頃から地域とのつながりがあったからこそ、助け合えた」と思いました。そして日頃からの備えと、普段からの地域の方との顔の見える関係、命を守ることの大切さを伝えていけたらと切に思いました。それは地域の方たちのあたたかい思いとつながりの大切さが震災を乗り越える大きな原動力になったからです。



にわか茶屋・東四郎丸小 視聴覚室



地域の小中高生ボランティア

(2) 2011. 6月・10月 地域の人たちと「震災の振り返り」

その後、6月には避難所運営をした方たちや地域の方たちと「自分たちがやったことはどうだったのだろう」と111人で9グループに分かれて、「震災の振り返り」をしました。「炊き出しの方法は正しかったのか・必要な情報は伝わったのか・支援が必要な方たちの居場所はあったのか」などKJ法でワークショップを行い、東北福祉大学岡ゼミの協力でデータ分析をしました。10月には、6月のアンケートデータを基に、地域に関するさまざまな機関（町内会、社協、NPO、消防団など）の人たちを集め、避難所に関する振り返りをしました。平成15年から「ほっとネット in 東中田」主催で毎年地域の課題を取り上げ、6月、10月と2回講演会をしていたことから、自然に振

グループ1	日頃のコミュニケーションと訓練、有事の際は正しい情報の収集と発信
グループ2	避難所の周知徹底、組織の明確化による混乱の回避
グループ3	訓練の重要性と自助の精神、避難所運営に関する情報の明確化
グループ4	地域に密着した情報と要支援者対策の重要性
グループ5	避難所や避難に関する情報提供と避難所における組織の明確化
グループ6	普段の付き合いがものをいう！
グループ7	日常的な地域の繋がりや情報伝達の重要性
グループ8	情報の重要性と避難所における必要な物資
グループ9	地域における役職者と組織の明確化

り返りの場を作ることができました。各グループの象徴的な意見を取り上げてみました。

この2回の振り返り会議から、「近隣のコミュニケーションが大切・学校や地域がみんなにつながっておくことが必要」ということが見えてきました。そして、被災地に生きる一人として「東日本大震災の教訓を伝えていくこと」をしていくべきと考え、前年の「HUG」講習にかかわってくださった方たちに声がけし、実行委員会を3月に立ち上げ、少しずつ準備をしていきました。

(3) 2013年8月「仙台発そなえゲーム」の誕生

2012年8月から、市民協働による地域防災推進実行委員会としての活動を本格的に開始しました。実行委員会としては「東日本大震災の教訓を未来へ伝えたい」、仙台市市民局としては「市民との協働を模索していたこと」、消防局としては「自助・共助による防災の普及を目指していたこと」から【市民協働】で仙台から発信できたらというみんなの願いがひとつになり、仙台市市民協働事業提案制度を通して2年間仙台市役所と仙台市民が協働してきました。その結果震災の教訓を未来へ活かす「仙台発そなえゲーム」が誕生しました。2年間で会議は96回。100人の協力者の意見を参考にしながら何回も練り直しをして、カタチにできました。実施会は、東中田地区協力者の方たちから始まり、仙台市内協力者、アドバイザーの先生方、大学生対象の実施会を重ね、2013年に8月「仙台発そなえゲーム」が完成しました。

(4) 「仙台発そなえゲーム」とは

参加者一人一人が仮想の「ある町」に住む架空の住民になって「災害に備えるために、自分や地域に何が必要か・何ができるか」について考えながら実践的に防災・減災を学ぶことができる体験型のボードゲームです。このゲームの特徴は参加者が架空の住民10代～80代の男女のいずれかになり切り、その立場で災害への備えを考えることにあります。それは地域社会に住んでいる様々な世代の住民に気づき、思いを巡らすことにつながります。

三色のカードがあり、青カード「災害時にあったらいいな」と思う物、緑カード「地域にあったらいいな」と思う事柄、黄色カード「自分ができたらいいな」と思う活動を選んでマップの地域においていきます。そうすると「みんなのそなえのまち」が生まれます。

また 震災以降作られた「仙台市地域防災新計画」に基づき、「がんばる避難施設」「いっとき避難場所」「補助避難所」を「仙台発そなえゲーム」にも取り入れ、周知を図るツールとして「仙台発そなえゲーム」が活用されることを願って作りました。

実施会を行って参加者のみなさんから教えていただくこともたくさんあります。

小学生がカードをおき終わった後に「やさしいまちになったね」と言ったり、8代のおばちゃんのカードを引いた高校生は名前を決めるのにとでも迷っていましたが、終わったら「おばあちゃんに電話しよう」と言ったり、防災のことばかり

つながって家を作っていこう！
家族と・近所と・ちいきと・みんなで



でなく、人のつながりゲームになっていることが「仙台発そなえゲーム」のよいところかなとも思っています。教えてくれたのは体験してくださった皆さんです。

～自分でそなえる・みんなでそなえる・つながって未来に活かすあらたな防災～それが「仙台発そなえゲーム」です。

マスコットキャラクターは「Sonae-san」です。みんなの家です。

(5) 2013年8月から「仙台発そなえゲーム」の普及活動

完成してからは、町内会や学校、市民センター（公民館）等で普及活動に取り組んできました。「仙台発そなえゲーム」は仙台市内及び県外へ防災ツールとして、小・中学校や高校での防災教育へそして、消防大学の教材に掲載されるなど歩みのあるゲームとなってきました。また「せんだい防災のひろば」にも参加し、2014年から「ファシリテーター養成講座」も実施しています。40人ほどのファシリテーターが誕生しています。

そして2013年は仙台市内で36回の実施会、2014年は東京都板橋区や石川県などでも実施会を行うなど全国への足がかりをつかむことができました。また太白区総合防災訓練のモデル地域として2013年は東四郎丸小、2014年は袋原中学校が選ばれ、総合防災訓練で「仙台発そなえゲーム」実施会も行いました。

今年度は宮城県の他町村や大阪府社会福祉協議

会や東京都港区介護予防総合センターや福岡県消防防災指導課でも実施会を行います。また小中学校での防災学習プログラムとして「仙台発そなえゲーム」が活用されています。「仙台市防災ボランティア」表彰、「総務省・消防庁防災まちづくり大賞」を受賞するなど励みになることが続きました。

今後は仙台市ばかりでなく、関東、関西、西日本など全国で「仙台発そなえゲーム」の普及活動を進めていき、東日本大震災の教訓を伝えていきたいと思っています。

(6) 国連防災世界会議への参加

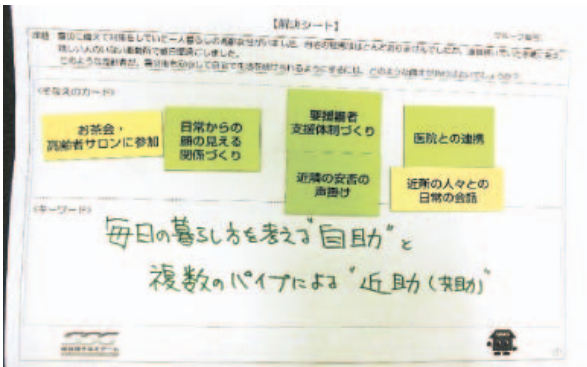
2015年3月、国連防災世界会議パブリック・フォーラムの東北防災・復興パピリオンで仙台市復興局と共に「仙台発そなえゲーム」を発表し、テーマ館「市民協働と防災」ではシンポジウムと実施会を、「高齢者と防災」（体験教室）では実施会を開催するなど、全国の方や外国の方へ「仙台発そなえゲーム」を伝えることができました。

テーマ館「市民協働と防災」実施会の参加者、自由見学者は200人を超えました。

市民局と共に実施できた実りあるイベントとなりました。外国の方たちの見学も多く、通訳を介して、【仙台発そなえゲーム】を伝えることができました。子どもも大人もみんな防災・減災の事を楽しみながら学べる「仙台発そなえゲーム」です。ぜひ活用して下さい。



国連防災世界会議テーマ館「市民協働と防災」



ステージ4 解決シート

(7) 今後へ

震災の時には、袋原中学校区の学校と地域が大人も子どももつながって乗り越えてきたことから、震災後の地域コミュニティ再生・新生に新たな活動が加わることになりました。

東日本大震災の教訓を未来に活かし、自分たちの地域をいつまでも住み続けたいと思えるまちづくりをしていきたいと考えています。そして新しい防災「仙台発そなえゲーム」をツールとして、いろいろなところで地域防災・減災ワークショップが行われ、次世代につなげる地域と学校との「避難所運営マニュアル」作成にも活かされることを願っています。

今後は「仙台発そなえゲーム」の製品化やバージョンアップを考えるときに、東日本大震災で課題となった要支援者たち、発達障がいの子どもの職場や交流の場になるようにしていきたいと願っています。

夢の描ける地域・・・それは「仙台発そなえゲーム」がつくる「そなえのまち」だと思います。みんなで合言葉にしましょう。

～【自助】【共助】【減災】そ・な・え【そなえ】～



<仙台発そなえゲーム>





「SSG仙台発そなえゲーム」



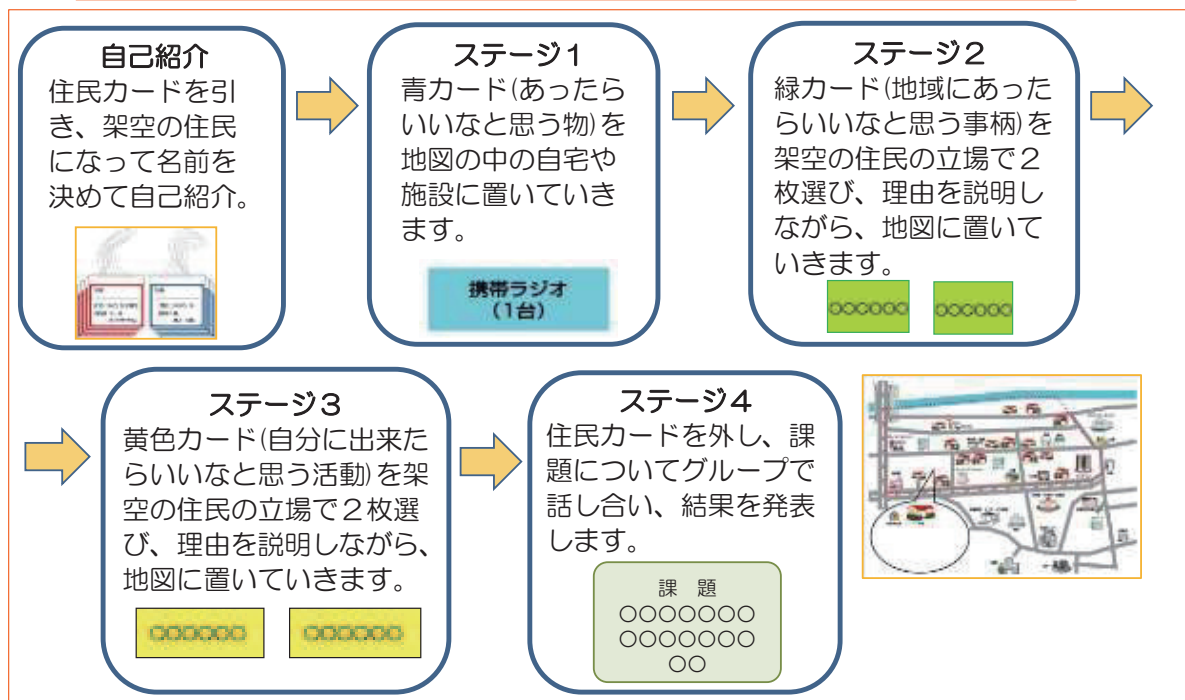
市民協働による地域防災推進実行委員会
代表 小岩孝子

少子高齢化に伴い、ひとり暮らしの高齢者の増加や災害時の要援護者支援の問題等、従来の地域コミュニティとは異なる様々な問題を抱えていた状況の下に東日本大震災が発生し、私たちは「日頃からの備え（自助）」と「人のつながり（共助）」の大切さを改めて気づかされました。

東日本大震災を体験した仙台市民として震災の教訓を後世に伝えていくことが使命であると考え実行委員会を立ち上げ、仙台市と協働で将来にわたり震災の教訓が伝わるように「なすことにより学ぶことのできる」防災ゲームの開発に取り組みました。

私たちが開発した「SSG仙台発そなえゲーム」は、参加者一人一人が架空の住民になって「災害に備えるために、自分や地域に何が必要か・何ができるか」について考えながら実践的に防災・減災を学ぶことができる体験型のボードゲームです。

【ゲームの流れ】 ゲーム時間：100分／グループ人数：6～8人



このゲームの特徴は参加者が架空の住民10～80代の男女のいずれかになりきり、その立場で災害への備えを考えることにあります。それは地域に住んでいる様々な世代の住民に気づき、思いを巡らすことにつながります。

被災地・仙台から全国へ世界へ発信し、「SSG仙台発そなえゲーム」が活用され、災害時の防災・減災に役立つツールになることを強く願っています。

【市民協働による地域防災推進実行委員会】

事務局：NPO法人 FOR YOU にこにこの家 (担当) 小岩・大野
〒981-1101 仙台市太白区四郎丸字神明16-2 TEL/FAX 022-241-0858